

2、海幸丸代船建造

本船は昭和31年7月進水した木造漁業試験船海幸丸(62.64トン 180PS)が老朽化著しくかつ法定耐用年数も終えたのでこれが代船として建造された。本邦沿岸から東西カロリン群島周辺の赤道海域にいたる海域においてまぐろ延なわ、底延なわ、底魚一本づり等の漁業試験、調査、ならびに沖合漁況海況調査を行なうものである。

昭和38年10月7日入札の結果清水市三保造船所に落札直ちに起工、昭和39年3月12日進水、昭和39年4月10日完成した

一般計画

本船は当初木造85トン級の計画であったが100トン未満の小型漁船において最近著しく鋼製の傾向にあり種々検討の結果鋼船に変更された。たまたま水産庁は船員労働環境条件改善措置要綱を示しこれにもとづきとくに船員居住設備は船員設備基準に合致するものとし一般漁船のモデル化を図った、本船は各状態を通じて十分な耐航性を有し、とくに全体の重量軽減ならびに重心低下を計る必要あり、構造物の重量軽減ならびに艤装品の簡易軽量化に努めた、船型は従来甲板室型であったが水産庁当局の指導を得て復元性能のよい船尾楼は一層甲板型とした、この結果居住区の一般配置については船尾楼内にまとめこの種大きさのものとしては居住性を著しく向上し得た、なお本船の特徴として主機関に歯車減速機関を採用、遠隔操縦を容易ならしめかつ一般低速機関に比べ容積が約 $\frac{1}{2}$ でありこのため一般配置設計の面でも大いに利するところがあつた。また船内電源については交直いづれも一長一短であるが交流の利点を採用交流化を図った。

一般概要

長さ (漁船法)	23.50M	
巾 (")	5.60M	
深さ (")	2.50M	
総トン数	99.65トン	
純トン数	28.17トン	
総積量	282M ³ 1292	
イニシアルトリム	0.90m	
燃料油艙	45.24M	
清水艙	14.42M	
乗組員定数	20名	(調査員1名・船員19名)

航 統 距 離

約8.000浬

機関部要目

主 機 関

新潟鉄工所製

減速機関付単働4サイクルディーゼル

6NG18HS型 300PS×950RPM 1台

遠隔操縦装置

新潟鉄工所製

クラッチ嵌脱及回転制御

補 機

ヤンマーディーゼル製

48PS×900RPM 1台

発 電 機

神鋼電気製

自励式3相交流 225V

(主)35KVA (補)15KVA(主機駆動)各1台

変 圧 機

日立製作所製

自 冷 式 5KVA 2台

蓄 電 池

神戸電池

24V SR-200型 1組

セレン整流器

清水電業社製

セレン整流式 1台

配 電 盤

清水電業社製

鋼製ライブフロント型 1台

冷 凍 機

新三菱重工製

5.5KW 電動 R-12圧縮機

3.05RT 1台

空気圧縮機

三和鉄工所製

V型2段圧縮機 30kg/cm²

3PS 原動機付 1台

甲板機械類

揚 錨 機

中谷鉄工所製

5.5KW電動 1.5^t×11m/min 1台

操 舵 機	中山工業製 手動油圧式	1台
ベルトコンベヤー	みなと工業製 1.5 KW電動 3.5 m	1台
軸流送風機	八州電気製 0.75 KW電動 機関室 居住区用 各	1台
航海設備		
磁気コンパス	布谷精機製 T-150型	1台
レ ー ダ ー	東京計器製 MR-22型	1台
ロ ラ ン	光電製作所製 KS-335型	1台
無線方向探知機	// KS-262S型	1台
魚群探知機	本多電子工業製 1.000 ^M	1台
旋回マド	中央計器製 300φ	1台
探照灯	横浜機工製 2KW	1台
電気水温計	明陽電気製	1台
無線設備		
主送信機	日本無線製 A1 150W	1台
補助送信機	// A1 75W A3 25W	1台
受信機	// 全波	2台
無線電話	// DSB 27MC 1W	1台
拡声装置	// 15W	1式
漁撈設備		
ラインホーラー	泉井鉄工製 4号型 (無段変速機付)	1台
電動測深儀	鶴見精機製 600 m可測	1台
流向流速計	東邦電探製 CM2型 300 m 可測	1台
諸試験成績		

速力試験成績

施行月日 昭和39年4月3日

場所 三保興津沖

海上の模様平穩

吃水 船首 0.697M

船尾 2.750M

平均 1.724M

トリム 2.053M

排水量 129.69T

推進器深度 1.683M

方形肥摩係数 0.60

負荷	1/4	1/2	3/4	4/4	12/10
主機回転数 ()	599 (249)	754 (314)	863 (360)	950 (396)	1020 (425)
軸馬力	75	150	225	300	360
速力	7.178	8.336	9.062	9.839	10.344
失脚率	-3.46	4.68	9.66	10.87	12.63
アドミラルテイー係数	126.2	98.8	84.7	81.3	78.7
速長比	1.64	1.91	2.07	2.25	2.365

(註) 回転数() はプロペラ回転数を示す

$$\text{アドミラルテイー係数} = \frac{\Delta^{2/3} \times V^3}{B.H.P}$$

$$\text{速長比} = V / \sqrt{LW}$$

$$\text{推進器 } D = 1.530 \quad P = 860$$

$$\Delta = 129.69 \quad \Delta^{2/3} = 25.6$$

$$LPP = 23.00 \quad LW = 23.75 \quad \sqrt{LW} = 4.873$$

綜合性能表

項 目	空荷狀態	滿 載 狀 態			
		出 港	漁場発	入 港	
排 水 量 (T)	125.07	208.25	187.60	170.40	
相当吃水 (M)	1.733	2.448	2.279	2.132	
吃 水	船 首	0.688	1.702	1.422	1.179
	船 尾	2.688	3.140	3.069	3.014
	平 均	1.688	2.421	2.246	2.097
ト リ ム (M)	2.000	1.438	1.647	1.835	
☒ G (M)	1.70	1.05	1.33	1.51	
☒ B (M)	0.46	0.62	0.56	0.52	
M.T.C (T-M)	1.38	2.075	1.92	1.79	
☒ F (M)	0.42	1.17	1.03	0.88	
T.P.C (T)	1.06	1.22	1.18	1.15	
T.K.M (M)	2.91	2.66	2.66	2.66	
K G (M)	2.37	2.19	2.18	2.25	
O G (M)	0.81	-0.09	-0.07	0.29	
G M (M)	0.54	0.47	0.48	0.41	
KG/D	0.948	0.876	0.872	0.900	
Fd ☒ (M)	1.050	0.317	0.492	0.641	
積 荷 重 量 (T)					
乗組員所持品		2.00	2.00	2.00	
糧 食		1.40	0.56	0.14	
燃 料 油		40.29	16.40	4.22	
潤滑油・軽油		0.90/0.20	0.63/0.14	0.45/0.10	
清 水		14.42	5.77	1.44	
倉 庫 品		1.00	1.00	1.00	
漁 具		5.50	5.50	5.50	
漁 獲 物			30.34	30.34	
そ の 他		0.27	0.19	0.14	
碎 永 及 餌		15.00/2.20			
合 計		83.18	62.53	45.33	

3、深海底刺網漁業試験

県下の主要な漁船漁業である、中型および小型機船底曳網漁業の夏期間漁期対策として、深海漁場の積極的な開発を目的に、漁場調査と深海底刺網の漁業試験を実施した。

1、調査試験期間

漁場調査 昭和38年5月20日～6月30日。

試験操業 昭和38年7月12日～8月23日。

2、調査船と試験船

漁場調査船 集団操業指導船 多幸丸 19.98トン 90馬力

漁業試験船 深海底曳網漁船 第二東海丸 32.84トン 95馬力

3、漁場調査と漁業試験の概要

(1) 調査船による調査結果から、渥美外海、伊豆諸島周辺、御前崎沖合、勝浦沖合のいずれも、潮流は1.5ノット以下であり、操業に支障がないと予想された。海底状況からは、渥美外海の大山沖合、大王崎沖合の急深の周辺と、金州の瀬が、操業場所として有望視された。

(2) 試験結果

使用漁具は、網長80m、網丈6m、網目13.2cm、ナイロン15本(北洋けいそん流し網の中古網)18反、網長75m、網丈6m、網目16.5cm、ナイロン15本20反。いずれも縮結5割に仕立て上げ、38反の試験網を用意した。揚網作業は、試験船が装備する、底曳網用のローラーを使用した。

試験期間を通じて行なった、5航海、15回の操業結果から、投揚網作業はかなり順調に進行した。

漁具構造は、対象魚の、ら網状況からみてかなり良好であり、網目の相違による、漁獲の差は認められなかった。

試験操業の主目標とした、渥美外海深海漁場は、2航海、5回の操業を行なったが、予想外の不成績であった。

御前崎沖合、金州の瀬、伊豆諸島周辺のひょうたん瀬で、めだい、くろめじな、あかいさき、なんようはちびぎ等の瀬付魚が漁獲された。

4、取りまとめ

試験操業期間は7月中旬から8月下旬。航海回数6、(うち予備試験1航海)操業回数15回の僅かな試験結果から、深海底刺網漁業の成否を論ずることは早計であるが、渥美外海漁場が不成績であったこと、試験操業期間を通じて十分な漁獲が得られなかったこと等から、大きな期待は

持ち得ないと考えられた。

しかし漁獲成績は、漁場選定の良否にかかっているため、漁獲実績のあった漁場を主とし、未調査漁場についても、能率的で効果のある漁場調査を実施する必要がある。

試験結果の詳細は、深海底刺網漁業試験報告書に取りまとめ、県内関係先に配布したから、省略する。

4 まだこ養殖技術普及試験

県下の漁村に海産魚類養殖業の気運をたかめ、養殖技術の普及をはかるため、箱型いけすによる、まだこ養殖技術普及試験を実施した。

1. 試験地、南知多町篠島漁港

試験地の選定については、①篠島漁村は、かつてたこつぼ、たこ一本づり等のたこ漁業が盛んであつたこと。②近年たこ資源の減少により、たこ漁業が衰退し、関係漁業者間にまだこ養殖の気運が高かつたこと。③伊良湖水道に面し、海況が安定していて、低かん水高水温等によるたこ養殖への悪影響が少ない等の諸点があげられる。

2. 試験期間・ 昭和38年6月23日から 8月8日までの47日間。

当初は秋期から初冬にかけて実施する計画であつたが、地元からの要望もあつて、梅雨明けの6月23日から養殖を開始した。

3. 養殖いけす

箱型で、底面と前後面はビニール被覆金網張りとした。側面と天井は板張りで、天井の中央部に開口ふたを取付けた。

長さ3m・巾1m50cm・深さ90cm・であり、5箇製作した。

4. 種苗

篠島漁協に水揚されたまだこを次のとおり購入した。

6月23日 250尾 120kg 1尾平均 480g。

6月27日 186尾 82.5kg 1尾平均 445g。

5. 管理

毎日の管理作業は、篠島漁協理事辻進之助氏が担当し、意欲的に投餌、いけすの清掃作業に従事し、いけすの入れ換え、養殖まだこの秤量、取り揚げ作業等は、試験場職員が、辻氏の協力を得て実施した。

6月23日に購入した種苗は1号いけすに収容し、27日に購入した種苗は2号いけすに収容した。

7月2日、1号いけすを予備いけすと取り換え、体重を測定した。

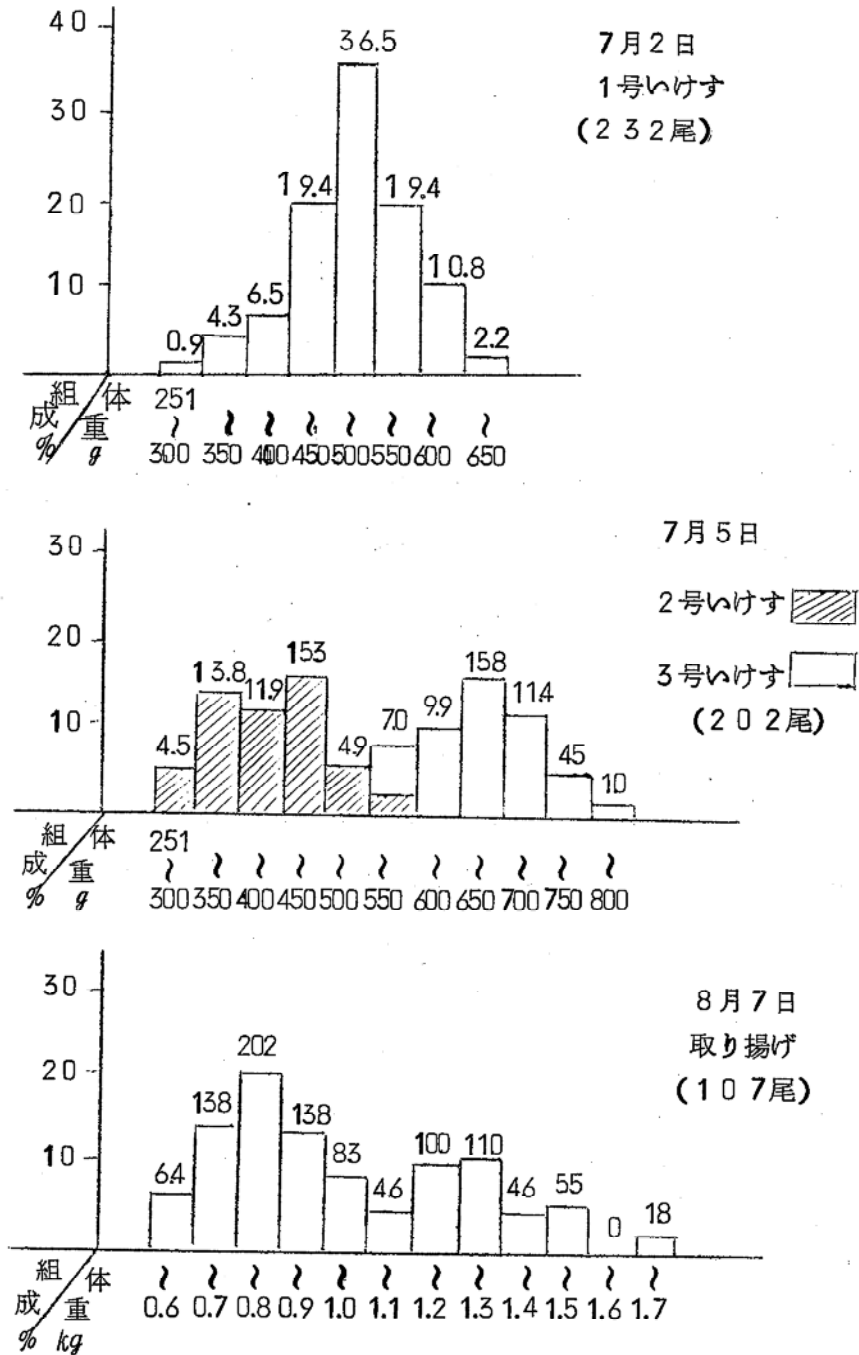
7月5日、2号いけすを予備いけすと取り換えると同時に、体重を測定し、大小を選別し、大きい種苗は3号いけすに収容した。1号いけすの大きい種苗も選別し、体重測定後、3号いけすに収容した。

8月7日、大小の種苗107尾を取りあげ、44尾を篠島漁協で販売し、65尾を東幡豆漁

協に種苗として分譲した。

7月2日、5日、8月7日の体重測定結果は第1図のとおりである。

才 1 図 体重組成



6. 餌料

種苗重量の8~10%を目安として、前日の食い残し量、種苗の摂餌状況等を考慮して、原則的には、早朝、摂餌が激しいときは、午後にも投餌した。投餌総量は第1表のとおりである。

第 1 表 投 餌 量

餌 重量	小あじ	ばか貝	あさり	しやこ 雑かに	雑かに	雑魚	計
重量kg	654.1	40.3	15.7	47.0	49.0	16.7	822.8
組成%	79.5	4.9	1.9	5.7	6.0	2.0	100

7. へい死

養殖期間は、梅雨明けから夏期高水温期にかかり水温、比重ともに悪条件であつて、確認したへい死尾数は108尾、種苗総数436尾の24.5%になり、かなり高率であつた。

8. 成長

養殖期間 47日間で、篠島漁協で、販売した44尾の平均体重1.26kg、種苗用に分譲した65尾の平均体重770gで、種苗平均体重465gに比べると、順調に成長している。ちなみに体重のモードは、種苗投入後10日に測定した結果が451g~500g(1号いけす)401g~450g(2号いけす)であつたものが、取り揚げ時には、0.7~0.8kgと1.2~1.3kgの2つのモードに移行している。

9. とりまとめ

短期間の養殖であり、技術普及を目的として管理作業の大半を篠島漁協辻氏に依頼したため充分な資料が得られていないが、時期をよれば、県下でのたこ養殖は充分可能であることを確認した。またたこ養殖事業は、同年秋期の適期に、県下南知多地区、幡豆地区の漁村で、漁協、研究グループによつて実施され、普及の効果をあげた。

8月7日の取り揚げ後の残りの種苗は、一つのいけすに集め、高水温期にどの程度耐えるか観察を続けたが、高水温と、冷蔵庫に貯蔵していた餌料の鮮度も低下して、種苗のへい死が続出したため、8月25日に管理を打ち切つた。

最終取り揚げは48尾40kgであつた。

b、浅海保護水面調査

保護水面管理事業として前年度に引続いてあさり種苗の発生分布を知るために、種苗の組成ならびに貝類のせい息量調査を行なった。

(1) 田原町地先におけるあさり種苗組成調査(昭和38年5月)

保護水面周辺5点を選び50cm平方の中のあさを5mmのふるいにかけて採集し、その平均値を求めた。

あさり種苗の組成

級	かく長(L)	数量	かく高(H)	かく巾(W)	W/H
A	~ 1.5 ^{cm}	4 ^個	1.15 ^{cm}	0.55 ^{cm}	0.49
B	1.6~2.0	68	1.30	0.76	0.59
C	2.1~2.5	151	1.56	0.95	0.61
D	2.6~3.0	118	1.85	1.14	0.62
E	3.1~	16	2.16	1.33	0.62
計		357			

摘要

- ① 2.1~2.5cmのものが約半数2.6~3.0cmが約 $\frac{1}{3}$ を占めている。
- ② W/Hが示すようにかく長の伸びと共に巾が大きくなってゆくが、2.6~3.0cmからはあまり大きくならない。これは種場であるため密殖となる結果で他の養殖場へまき付ければやはり大きくなってゆく。

例えばL=4.0 H=2.7 W=2.0 W/H=0.74であり、六条湾漁場に比し成長するにしがいだるま型となる。

(2) 貝類せい息量調査(昭和38年8月)

第1図の15点を撰び採集には大潮時に15cm平方の鉄わくを用い、計数結果は整理の都合上1㎡当りに換算した。

貝類せい息量 (1m²当り)

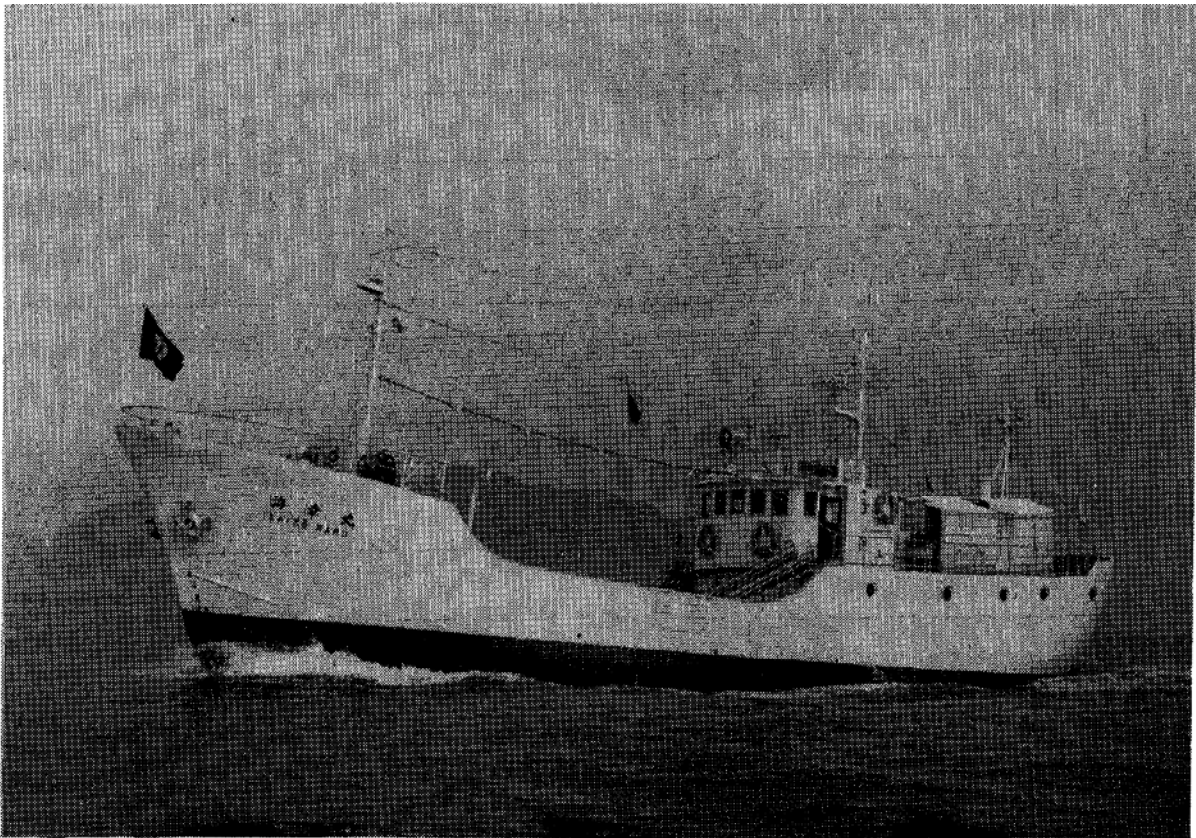
S T	貝類	あさり		はまぐり	ほととぎす	しほふき	その他
		稚貝	成貝				
牟 呂 町 地 先	1	44	1.646	579		89	
	2	133	1.869			89	
	3	222	400	311		578	
	4	89	712	222		845	
	5	489	2.091		44	400	178
	6	445	2.447	178		3.060	
	7	2.269	3.070		44	4.672	
	8		712				
	9	756	2.447			1.735	
	10	311	845	356		1.201	
	11	578	1.157				
田 原 町 地 先	12	2.136	20.294				44
	13	89	4.628				
	14		6.501				
	15	12.015	13.083				

摘 要

- ① あさり稚貝(1.0~2.0)は四郷沖に多く三郷の保護水面においてもかなりのせい息量をみた
- ② ほととぎすは減少しているが、しほふきが多くなっている。
- ③ 田原町地先ではほとんどあさりであり、その半数が稚貝であって最適の種苗場といえるがその範囲は狭く砂利が非常に多い。

(3) 調査の結果

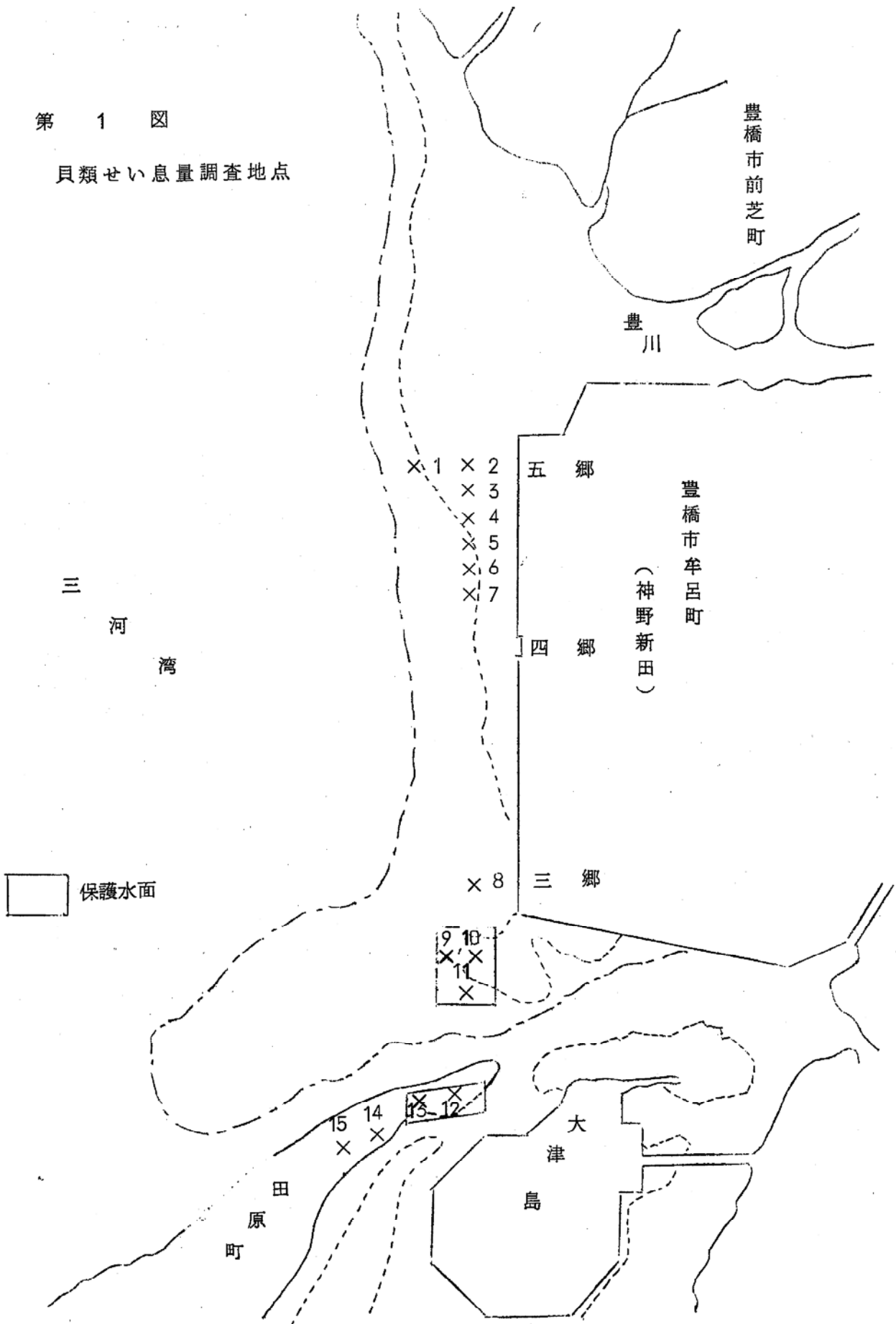
- ① 保護水面のあさり種苗は総体的にやや減少していることと、牟呂地先では北部へ、田原地先では南部へ多少移動する傾向が見られる。
- ② 牟呂町地先における稚貝の濃密発生地は前年と同様に豊川河口附近と考えられるが、育つものが極めて少なく死貝が多い。今後この稚貝を育てる方法として早期に保護水域へ仮殖することがのぞましい。
- ③ 田原町地先は成長は非常によいが、砂利の撰別が困難なるために遠方への輸送に適しない難かしさがある。
- ④ いづれも稚貝は、水流がよく凹みのある場所に多く、こうした環境造成の意味で今後耕耘を続けることは最も効果的である。



(漁 業 試 験 船 海 幸 丸)

第 1 図

貝類せい息量調査地点



6 水産業改良普及事業

1, 事業の現況と生産

(1) 本県の改良普及事業

本県の改良普及事業はその生産の大部分を占める、のり、わかめ養殖業を中心に進めており一方魚類養殖の普及、漁船の機関、機器の診断をも強力に推進した。

ア、 のり生産のうつりかわり

年次	組合数	戸数	人員	面積	網 ヒビ				生産		
					網数	重枚	ね枚	網使用枚数	浮竹ヒビ	粗朶	枚数
		戸	人	ha	千冊	枚	千枚	千冊	千株	百万枚	百万円
26	50	8,191	24,820	990	2	1	2	1	2470	124	600
27	55	8,543	27,167	1,670	12	1	12	6	2,795	176	
28	58	8,937	30,477	1,670	90	1	90	2	2,213	108	594
29	61	9,532	32,000	2,080	150	1.2	180	1.4	2,050	241	
30	65	9,235	32,500	2,330	160	1.5	240	2.2	1,785	300	1,800
31	65	9,500	33,000	2,470	200	1.5	300	2.2	1,500	380	
32	65	10,815	33,113	3,360	314	1.5	471	0.8	1,631	210	1,250
33	75	11,000	33,500	3,640	350	2.0	700	0.7	パレン 900	450	2,250
34	84	11,053	36,395	4,780	390	2.0	780		パレン 654	542	3,560
35	85	11,100	36,400	5,000	400	2.2	880	浮流し枚 400	パレン 400	861	4,500
36	80	10,500	35,000	4,500	440	2.4	950	4,000	パレン 25	1,250	7,250
37	70	10,000	32,000	5,000	480	2.2	1,056	6,000	20	1,300	10,000
38	71	9,500	35,000	5,000	480	2.2	1,060	20,000	10	975	12,780

イ、 本年度の生産概況

本年は夏季8月下旬から種付期間の9月下旬まで気水温とも平年より2～3度低めに経過したため10年に1度と云われた彼岸張りが可能となり10月上旬の本張りも合せてその結果は極めて良好であった。

その後も温度は低めに経過し発芽も良く彼岸りの網は10月下旬すでに摘採可能となり11月上旬始各地で初摘採を行なった。

この頃から気象の異変特に無風暖気のため各地で生理障害を起し、加えて種網過剰による漁場の密植等のため腐れをも引起し、中旬から下旬にかけてのりはどんどん流失していった。この対策として急拳徒長したのりの摘採、網の吊上げ等の処置を講じた結果12月

上旬には何とかくいとめることができ、その後年が明けてからは生産は再開され2月下旬までで摘採を終った。

終了期の早かった原因は、親網、二次芽網共二次芽の発芽が悪かったため今後研究の余地を残している。

一方浮流養殖は前年の結果が良かったため施設数は大量にふえたが11月中、下旬の無風のため殆んど腐れ流失したため一部を除いてその後の生産も皆無となった。

以上のように本年は全国的に見ても70%弱と未曾有の大凶作に終わったが、本県は腐れ発生時の処置が良かったため幸い75%強9億7千5百万枚、金額は約130%、128億円と3年連続全国才1位の生産を示した。

2, 事業の実施経過

(1) 漁場観測速報

観測地点所在地	協力研究グループ名	期 間	実 施 方 法
豊橋市大崎町 幡豆郡吉良町宮崎 知多郡南知多町師崎 常滑市蒲池	大崎のり研究グループ 宮崎漁業研究会 師崎漁業研究会 鬼崎のり研究会	38年4月から 39年3月まで 12ヶ月間	観測記録は取まとめ帳に整理して毎月1回水試に報告させ水試はこれを取まとめ解折して県内各漁村に通報する。通報に当つては文書のほか、ラジオ、新聞、部落放送等を使つて効果的に行なう。特にのり種付時期の10月、11月は毎日報告させ、即日ラジオ、新聞等で通報する。
知多郡知多町 知多郡南知多町 蒲郡市三谷町	東大水産実験所 水試尾張分場 水試本場		
計 7ヶ所			

ア、時 間 原則として10時とする。

イ、項 目 気温、水温、最高最低、潮候、波浪、天候、風向力、比重。

(2) 増殖技術改良普及試験

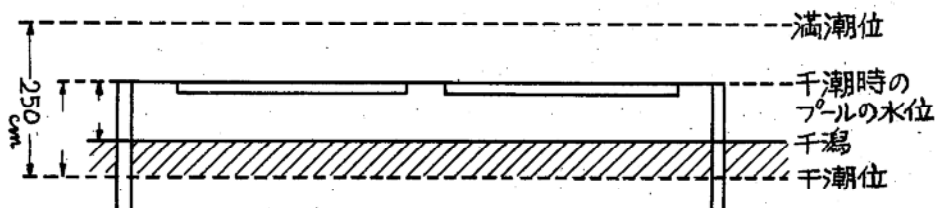
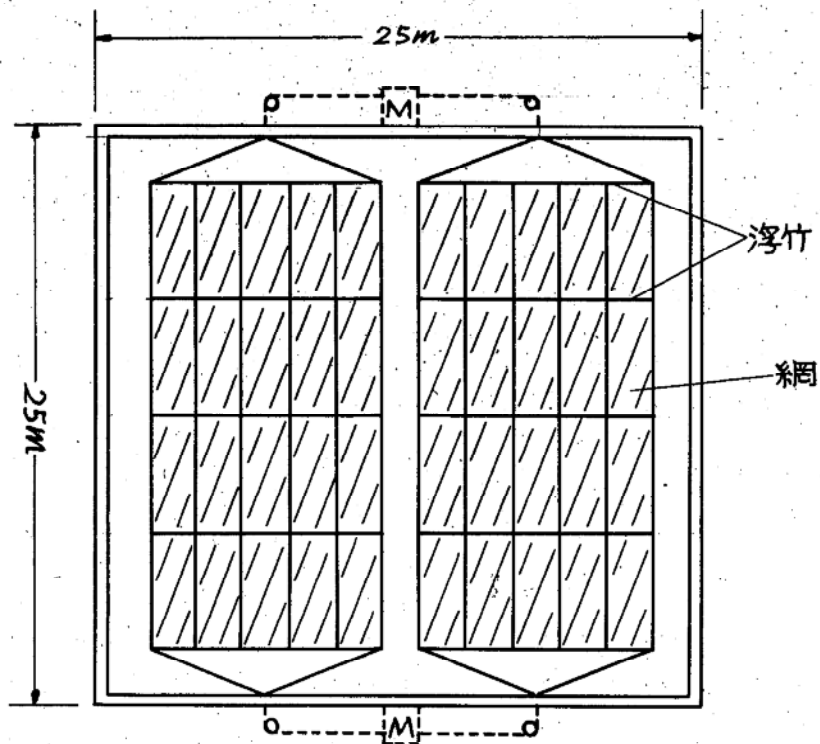
ア、 のり漁場開発試験

ア) 目 的

豊橋市豊川河口部で高干潟のため利用されていない所に人工潮溜を構築し、のり養殖を行なうと共に施肥試験をも行なう。

イ) 実 施 方 法

まず潮溜の構築には2mのシートパイルで25m角になるよう図の様に敷設した。



施設後しばらくは漏水がはなはだしく、のり網の施設が不可能なため止まるまで待つことにした。11月中旬になり或程度は止まるようになったがのり網を施設する程海水が溜まらず、一方のり網も試験地において11月下旬から腐れが発生し使用不能となったので試験は一時中止した。

のり優良種育成試験

(ア) 目的

前年に引続き室内人工採苗を活用して、のり優良種を選定し、のりの生産増とともに品質の向上をはかる。

(イ) 実施方法

本年度も県下各漁場において経験的に良いと思われる7種類を選定し、糸状体の培養—室内人工採苗—幼芽養成を一貫して水試で行ない、この網を次表の研究グループに配布し、固定、全浮動養殖で行なった。

配布研究会 のり種類	渥美 (1)	渥美 (2)	形原	三谷
松川浦	3枚	3枚	2枚	2枚
万石浦	3	3	2	2
水呑	3	3	2	2
鳴門	3	3	2	2
和歌浦	1	1	—	1
島原	1	1	—	1
計	14	14	8	10

(ウ) 結果

のりの糸状体の培養、採苗、幼芽の伸長、全浮動養殖については適地適種浅海増殖
研究報告参照

育成については各漁場における各試験網の収獲量と品質を次表のとおりまとめた。

試験網 1枚当りの収量と品質

研究会名 項目 種類	渥美 (1)		渥美 (2)		形原		三谷	
	枚数	品質	枚数	品質	枚数	品質	枚数	品質
松川浦	1,100	良	1,200	良	1,000	良	1,100	良
万石浦	1,200	〃	1,400	〃	1,200	〃	1,000	〃
水呑	1,200	〃	1,300	〃	700	〃	900	〃
鳴門	1,400	〃	1,500	〃	1,300	悪	1,100	〃
和歌浦	1,200	〃	1,400	〃	1,000	〃	900	〃
島原	1,200	〃	1,400	〃	1,200	〃	700	〃

(エ) 要約

収獲期前後に各漁場とも腐れで全滅した結果、漁期中を通じて各種別の収量の比較は
検討できなかつたのでくされ前後に1回あて行なつたものより推定で算出した。

ウ、わかめ養殖試験(三河地区)

昨年の結果では外海性の伊良湖産のものを内湾で使用したため、伸長がおもわしくなかつ
たが、その他海中設置が遅れたこと、及び、芽出し管理をせずに直接養殖管理に移したこ

と等も不成績の原因であつたと考えられた。それで本年は内湾性の宮崎、佐久島産のものをを用いて海中吊下を早くし、芽出し管理を行つて確実な種苗で養殖試験を行うことにした。

① 期 間 昭和38年11月16日～39年3月31日

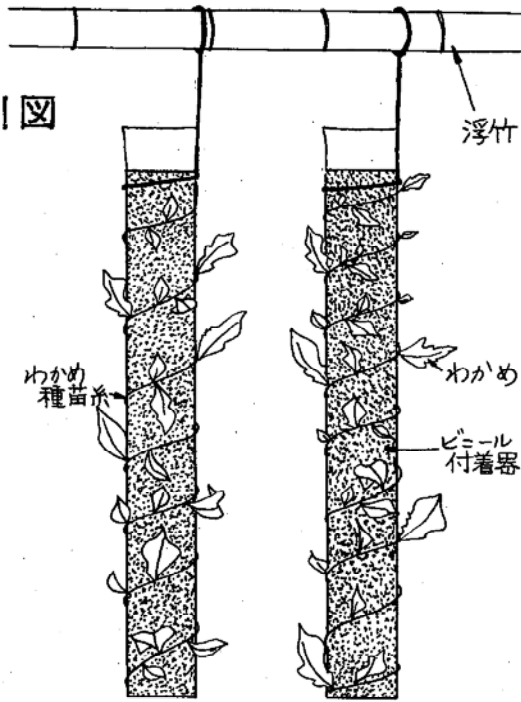
② 場 所 蒲郡市三谷町愛知県水産試験場前漁場

③ 方 法

昨年に続き貧栄養地域での養殖方式として、ビニール管垂下式を採用し、施肥した場合と無施肥の場合とを比較試験した。吊下法は才Ⅰ図の通りで5寸真竹(直径約6cm、長5m)を浮かし、それから、わかめ種苗子を巻きつけたビニール管を50cm間隔で10本吊下した。

付着器は塩化ビニール製径5cm×長1mの測面に約2.5mm径の小穴が多数あけてある管で中に日本肥料の粒状肥料を充填し、その管の表面に巻きつけたものを10本ずつ用意し、それぞれ別々に前記の様に設置した。結果は、才Ⅱ表に示した通りである。なお、肥料はビニール管の口径を昨年より大きくしたため充填し易くなつたが、粒状肥料の固形剤としての泥炭が軟化して管底につまるので、特に、わかめが良く伸長繁茂してからは入れかえが困難であつた。そのため、39年1月以降は追肥を打ち切つた。次に、施肥の効果であるが、成長の面では、わかめが色々な段階の大きさで発芽してくるため比較することが出来なかつたが、色沢に於ては差があり、効果のあることがわかつた。しかし、12月25日、それぞれ一部の大葉をつみとり、干上げ、製品にして比較したところ両者間に価格差が生ずる程の差はないようであつた。又、天然産のものに比べると各期とも一般に葉肉が薄かつたが、これは本年は風波がなかつたため養殖施設のものが特に水の動きが悪かつたからと考えられた。3月下旬に入り、色沢が黄化退色したもので施設を撤収、試験を終了した。

才|図



月日	施 肥	無 施 肥
11月 16日	最大葉 45 mm × 28 mm 最小葉 (可視) 2 mm × 1 mm 種 糸 10 cm に 6 ケ 吊下開始	最大葉 40 mm × 30 mm 最小葉 (可視) 2 mm × 1 mm 種 糸 10 cm に 13 ケ 吊下開始
11月 25日	最大葉 86 mm × 45 mm 最小葉 (可視) 2 mm × 1 mm 種 糸 10 cm に 9 ケ	最大葉 92 mm × 49 mm 最小葉 (可視) 2 mm × 1 mm 種 糸 10 cm に 8 ケ
12月 5日	最大葉 27 cm × 19 cm 基部クシバ状 最小葉 5 mm × 2 mm 濃茶色 追肥	最大葉 28 cm × 17 cm 基部クシバ状 最小葉 9 mm × 5 mm 濃茶色
12月 15日	最大葉 34 cm × 21 cm 最小葉 10 mm × 6 mm 種 糸 10 cm に 9 ケ	最大葉 41 cm × 25 cm 最小葉 5 mm × 3 mm 種 糸 10 cm に 16 ケ
12月 20日	最大葉 75 cm × 45 cm 基部成実葉形成 始まる。 最小葉 12 mm × 7 mm 一部つみとり製 品比較 追 肥	最大葉 73 cm × 50 cm 基部成実葉形 成始まる。 最小葉 8 mm × 5 mm 一部つみとる。

月日	施 肥	無 肥
1月 10日	最大葉 85cm×63cm 莖部成実葉形成 最小葉 2cm×1cm 色や、黄化す	最大葉 89cm×70cm 莖部成実葉形成 最小葉 2cm×1cm 色や、黄化す
2月 10日	最大葉 80cm×60cm 成実葉成熟 最小葉 2cm×1cm 全体に繁茂、密殖 色や、薄茶色 葉肉 薄	最大葉 78cm×54cm 成実葉成熟 最小葉 2cm×1cm 全体に繁茂、密殖 色や、黄化、葉肉 薄

エ、わかめ養殖試験（知多地区）

南知多のワカメは浅海漁業の中で重要なもので、また、品質が良いことでも有名である。従来ワカメには色々な増殖手段がとられてきたにもかゝらず、生産はほとんどその年の海況に支配されて不安定である。

この頃、ワカメ養殖技術が進んで、全国的に普及段階に入り、他の増殖事業と肩を並べる程の結果をあげてきている。

37年度から南知多でも「角張り養殖方式」で試験養殖を行なったが、38年度の養殖結果は次のとおり。

ア) 養殖漁業と数量

オ1表は37年度と38年度にワカメ養殖を行なった漁協とその数量を示した。漁協により養殖数（角張り10m角数、又は種糸200mを1台と換算）に増減があり37年度の養殖結果の良否が養殖業者の意欲に影響して増加四漁協、減少二漁協、差引六角の減少となった。

イ) 養殖種苗

養殖に使用したワカメ種糸の大半は分場で培養、芽出ししたもので、遊走子付けに使用した根株（成実葉）は常滑市蒲池地先のワカメ（以下蒲池種という）と豊浜地先のワカメ（豊浜種）で、5月中旬採苗し、野間漁協の旧ノリ糸状体培養槽を借り培養して、10月11日から豊浜港内で芽出しした。

10月25日頃から幼芽が肉眼視されたので11月11日から各漁協に配布。

ワカメ種糸はノリ糸状体と同様にトロ箱で簡単に培養できるので、普及をはかり、師崎漁協では、30戸が100mの培養を行ない、芽出し処理して良い発芽を得た。

ウ) 養殖期間の海況

ワカメ養殖にとって、幼芽の発芽一成長には、水温が早く20℃以下となり、成

体の生長には15℃以下の期間が長い方がよい。

38年度の海況は秋の冷えこみが早く、南知多でも移動平均水温は10月上旬に20℃となり種糸の芽出し処理以後は17～18℃で幼芽に適し良い発芽を得た。

10月下旬から11月上旬にかけて温暖無風の海況となり、種糸は硅藻(ドタ)、雑藻の附着が多く、この除去のため2～3日ごとに振り洗いをして幼芽の保護を行なった。

11月中旬種糸配布以後の水温は、暖気が続き、降下が鈍く、親縄に附着する硅藻で種糸幼芽が巻かれる状況であった。

12月に入り15℃を割る日が増し、ワカメの成長が良くなった。以降、水温の降下は除々に2月中旬の7.3℃を最底に上昇した。

1～2月の旬平均水温は平年より2～3℃高く経過した。このためワカメの成長は1～2月は早く、3月中旬以降は急速に先き枯れを生じ、また、退色したため3月下旬～4月中旬で養殖を終了した。

エ) 養殖経過と結果

分場で養殖試験した小佐地先でのワカメ葉体の生長は才1図のとおり。

葉体長は12月下旬から急速に伸長し、1月中旬に摘採可能な葉体長50cm以上に達した。そして、以後、蒲池種と豊浜種とに大きな成長差ができた。

蒲池種は葉長方向に伸長が著しく、豊浜種は葉長が70cmで止まり、葉巾が伸長した。

両者の伸長差は一角当り(10m角)の生産量に影響し、生で460kg対320kgで蒲池種の収量が多かつた。

乾上げによる品質差はなく、1～2月は天然物との間にも、ほとんど差がなかつた。

このことから、養殖ワカメ種苗は漁場により品質を選ぶ必要がある。南知多では37年度の養殖結果から見ても、市場価値のある大きさ(50cm)に早く達することから「蒲池種」が適しているようである。今後、他県の種苗とも比較して、生長が早く品質が良く、色済ちしない種苗を見出す必要もあろう。

各地先の養殖結果は完全に把握できないが、師崎、豊浜、内海、片名の各漁協で判っている結果は才2表に示すとおり。ただし、才2表で、豊浜漁協の1～10は天然ワカメに混ぜて販売されているため生産量が少なく、また、各漁場とも自家消費量は含まれていない。

この結果からみて、10m角当りの生産は、最高40kg(干)16,800円、生産のあつた養殖角の平均は25~30kg、10,000円となつている。親縄1m当りに換算すると(10m角の親縄数180m)、最高0.23kg(干)平均0.15kg(干)で生産目標の1m当り0.5kgには及ばないが、成績は良かった。

オ) 養殖成績の考察

38年度では、漁協、当業者個々の成績はまちまちで差が大きかつたが、海況、漁場の良否を別にして成績を検討すると、

a. 種糸の良否

配布した種糸に蒲池種と豊浜種があり、両者に収量の差が見られた。また種糸は芽出しして幼芽を見たもののみ配布したが、粹により濃淡、長短があつた。しかし、これによる差は少ないようであつた。

種糸の使用量の多少は成績に影響し、種糸の量を多く使用して「挟み込み」より「巻きつけ」による方が発芽量が多く、良い成績をあげている。

従つて、当業者も種糸の自家培養を行つて、分場のみ種糸に頼らず、養殖に多量の種糸を使用した方が良いと思う。

b. 養殖操作

最も生産に影響したのは養殖操作にあつたと考えられる。いつたん、芽出しして幼芽が多数発芽した種糸を受取つて、のち養殖に移すまでの期間が長かつた業者ほど成績が悪い。

とくに、種糸を水槽など止水で保存した業者は不成績であつた。発芽した幼体が再び止水の培養で根付きを悪くし、養殖に移した直後に流失してしまうためである。

また、養殖後、11月中・下旬まで無風暖気が続き漁場での波立ちが少なく、親縄に珪藻の附着が多かつたため、幼芽が3~5cmに達するまで珪藻落しを行なつた業者の成績ほど良かった。

c. 養殖水深

養殖角の親縄のある位置は、水深50~100cm層が全期を通じて良く、150cm以上では生長が遅れる。

また、漁期の終り近くの3月でも、浅い方が色落ちが少ない。

この層に張り込むためには、10cmぐらいのピン玉を数多く使用して水深を操作すればよい。

d、 親縄の材質

従来、太目のロープを使用するように勧めてきたが、ロープの径はワカメの生長にほとんど関係ないことが判った。

要は、種糸に密生する程ワカメ幼体があれば、根部がからみ合つて基盤をつくるもので、3%径の硬撚りのものでも成績がよく、この方が波の抵抗も少なく施設が安くつく。

材質は長期使用を考えて、化繊ロープを使用し、また、ノリの附着も見られるのでビニロン系のロープを使用したい。

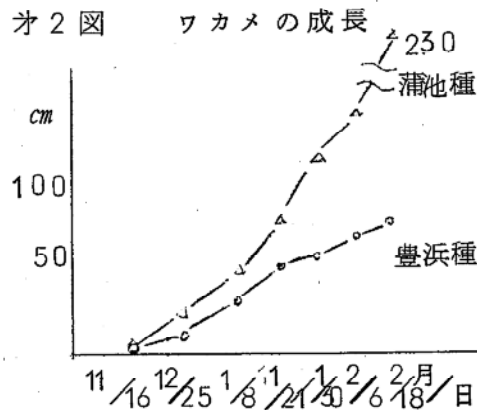
e、 販 売

生産量のほとんどが素干ワカメとして出荷された。この価格は豊浜で、kg当り最高747円、安値137円、平均400円で他県の生ワカメ販売価格の最高値で¹/3平均¹/4 ~ ¹/5 に当っている。

今後、ワカメ養殖が産業化するためには生産技術の向上も必要であるが、むしろ、販売面を強化する必要がある。そのためには、一般消費者に対して消費宣伝によつて生ワカメで市場へ出すことが販売価格の向上と安定化のための解決策ではなからうか。

オ1表 養殖漁協と数量 (単位角数)

年度	中州	豊浜	内海	片名	日間賀東	美浜	師崎	計
37	18	45	7	5	4	18	70	167
38	—	35	23	14	7	11	71	161



才2表 昭和38年度ワカメ養殖結果

組合名	業者符号	施設数	生産高(乾)	生産金額	一施設当りの 生産金額
	No.		kg	円	円
豊 浜	1	1	45.0	15,832	15,832
	2	2	25.5	6,359	3,179
	3	2	10.1	5,329	2,664
	4	1	14.9	4,337	4,337
	5	3	11.2	4,211	1,403
	6	—	9.7	2,240	—
	7	1	3.8	1,360	1,360
	8	1	2.8	976	976
	9	—	1.6	512	—
	10	1	1.7	408	408
	11	4	78.5	23,318	5,829
	12	4	134.0	34,703	8,518
	13	2	45.3	11,343	5,671
	14	4	115.5	29,653	7,410
	15	2	25.5	6,583	3,291
	16	6	92.0	19,527	3,054
内 海	1	1.5	58.4	24,800	16,533
	2	1	37.5	16,800	16,800
	3	1	33.5	16,000	16,000
	4	1.5	47.0	21,200	14,133
	5	4	30.5	13,800	13,800
師 崎	1	2	22.0	11,485	5,712
	2	4	14.9	6,800	1,450
	3	4	45.2	15,900	3,750
	4	8	—	0	0
	5	3	53.9	25,000	8,333
	6	1	12.0	6,000	6,000
	7	2	—	19,800	9,900
	8	2	50.0	20,000	10,000
	9	2.5	53.8	32,875	13,150
片 名	1	4	26.5	14,318	3,579
	2	4	42.0	15,250	3,810

(3) 巡回指導実績

ア、 増殖関係指導実績

(ア) 三河湾の部

月	回数	場 所	参集人員	所要時間	内 容
4	延11回	年呂漁協ほか	延450人	延33時間	のり糸状体診断ほか
5	9	名古屋水産会館	310	27	のり研究会ほか
6	3	豊橋 "	140	9	"
7	8	衣崎漁協ほか	300	25	のり糸状体診断ほか
8	10	年呂 "	260	28	のり人工種付講習ほか
9	30	渡津 "	1,050	95	"
10	16	田原 "	500	50	"
11	12	大崎 "	350	26	のり二次芽どりほか
12	11	下佐脇 "	400	33	のり腐れ対策について
1	15	吉田 "	550	42	のり施肥ほか
2	11	味沢 "	360	35	"
3	8	前芝 "	210	20	糸状体培養ほか
計	144		4,880	423	

(イ) 尾張の部

月	回数	場 所	参集人員	所要時間	内 容
4	延 6回	常滑市ほか	延1 50人	延1 5時間	のり糸状体培養指導ほか
5	4	美浜町 "	1 1 0	1 1	"
6	7	名古屋市 "	2 0 0	1 8	"
7	8	南知多町 "	2 3 0	2 2	のり人工採苗指導ほか
8	1 2	"	2 6 0	3 5	"
9	1 5	"	4 6 0	4 8	"
1 0	1 4	"	4 4 0	4 0	"
1 1	1 0	常滑市 "	3 1 0	2 8	のり腐れ対策ほか
1 2	8	"	2 2 0	2 1	"
1	5		1 6 0	1 6	のり施肥指導ほか
2	6		1 7 0	1 3	"
3	7	半田市 "	1 4 0	1 7	研究集会ほか
計	1 0 2		2.8 5 0	2 8 4	

(3) 漁業機械関係指導実績

指 導 内 容	巡回件数	集案件数	時 期
漁船機関のディーゼル化指導	3 0	1 5	周 年
漁船機関の診断と取扱指導	5 0	1 0	"
漁業の省力化指導	2 5	1 2	"
漁労作業の機械化指導	5	1 0	4月～12月
小型無線の普及	—	3	周 年
漁船運航技術指導	—	4	"
漁網資材の化繊化指導	4 6	9	"
計	1 5 6	6 3	

(4) 糸状体培養と人工採苗

年 度	糸状体培養				人工採苗網	
	水試	共同施設	ト口箱	計	貝殻使用数	種付網
33	千枚 120	千枚 250	千枚 500	千枚 870	枚 10~15	千枚 58
34	220	870	4,000	5,090	10~15	≒ 250
35	220	900	7,500	8,620	15~20	≒ 355
36	220	1,100	9,000	10,320	15~20	≒ 400
37	100	1,400	15,000	16,500	20~25	≒ 600
38	100	1,600	20,000	21,700	25~30	700

(5) 浮流し養殖について

現在までの普及状況

年 度	面 積	角 数	さく数	生産枚数
35	10 ^{ha}	40	400	千枚 600
36	100	400	4,000	10,000
37	1,500	600	6,000	18,000
38	5,000	2,000	20,000	20,000

(6) のり種付時期前後の各地先の海況

地名 月日	三谷地先19カ年平均			三谷地先			新舞子地先		
	気温	水温	比重	気温	水温	比重	気温	水温	比重
38年 15							25.3	26.2	18.1
9月 16				23.4	24.4	22.9	21.2	23.9	19.0
17				23.0	23.8	24.3	23.0	23.5	19.7
18				22.7	23.4	25.3	24.4	23.5	23.2
19				22.1	22.7	23.4	24.3	24.4	22.2
20				22.1	22.2	22.9	21.5	23.9	22.8
平均				22.7	23.3	23.8	23.3	24.2	20.8
21				20.6	21.2	19.1	20.1	21.6	22.0
22							19.6	20.6	22.0
23				19.9	20.9	24.7	19.6	20.5	21.5
24							18.8	22.6	22.7
25				20.2	20.7	23.5	20.6	20.8	26.0
26				20.4	20.6	23.8	22.2	22.5	18.4
27				21.3	20.8	24.3	23.2	22.8	24.8
28				21.5	20.5	21.8	23.0	22.7	21.7
29							22.5	23.5	22.7
30				20.9	20.3	21.1	21.5	22.4	22.1
平均	23.9	24.2	20.2	20.7	20.7	22.6	21.1	22.0	22.4
10月 1				20.2	20.2	23.2	21.7	21.6	22.1
2				21.3	20.9	23.8	21.7	22.3	22.8
3				20.9	21.1	24.3	22.2	22.4	27.9
4				20.7	21.1	22.2	21.8	22.7	23.4
5				19.9	21.1	23.8	22.6	22.6	24.3
6							17.8	19.2	26.4
7				20.3	20.7	25.1	18.5	19.2	23.2
8				20.0	20.3	23.4	16.8	18.0	23.1
9				19.3	19.7	22.8	17.0	18.4	21.3
10				19.3	19.5	23.0	20.4	18.7	21.2
平均	22.1	22.4	19.1	20.2	20.5	23.5	20.1	20.5	23.6

地名 月日	三谷地先19カ年平均			三谷地先			新舞子地先		
	気温	水温	比重	気温	水温	比重	気温	水温	比重
10月 11				19.2	19.6	24.9	21.4	20.5	21.2
12				19.2	19.5	24.8	20.6	20.0	23.1
13							21.1	20.6	23.7
14				19.4	19.3	21.8	21.6	20.4	23.2
15				20.3	19.3	20.9	21.4	22.0	21.8
平均				19.5	19.4	23.1	21.2	20.7	22.6

のり漁期中の各地先の平均気水温と比重

月	旬	三谷地先19カ年間			三谷地先			新舞子地先		
		気温	水温	比重	気温	水温	比重	気温	水温	比重
38年	上	13.9	13.1	21.0	14.2	13.2	21.8	14.0	13.7	19.9
	中	16.0	15.1	19.3	16.8	16.2	13.4	17.0	15.4	17.1
	下	16.1	16.3	19.1	17.0	16.1	21.3	16.6	15.7	18.6
5	上	19.2	18.5	19.3	18.8	18.3	17.1	18.6	18.2	15.8
	中	19.9	19.7	19.0	20.2	20.2	10.9	19.9	18.9	10.2
	下	21.8	21.1	19.7	22.8	21.3	13.3	20.6	19.9	12.1
6	上	22.4	22.3	19.1	21.7	20.9	16.1	22.8	20.6	10.5
	中	23.3	22.0	18.9	22.5	21.9	15.7	23.1	22.2	6.1
	下	24.6	24.5	17.9	27.0	26.3	16.8	28.1	28.4	10.1
7	上	26.2	25.7	18.0	27.1	27.0	19.6	27.7	27.2	13.4
	中	27.4	27.8	19.6	28.2	27.0	19.3	29.4	28.5	10.3
	下	27.5	28.4	13.0	28.0	28.9	21.5	28.3	29.1	16.4
8	上	29.8	29.6	20.3	28.1	28.6	23.1	29.0	29.7	18.2
	中	29.2	29.3	19.8	28.1	27.0	20.0	28.8	28.9	16.7
	下	28.6	28.1	12.2	28.6	28.7	22.2	27.6	27.5	19.9
9	上	27.5	27.4	20.7	26.2	25.3	22.5	25.9	25.9	16.9
	中	26.4	26.3	19.5	23.1	24.1	23.7	24.0	24.8	19.0
	下	23.9	24.2	20.2	20.7	20.7	22.6	21.1	22.0	22.2

月	旬	三谷地先19カ年間			三谷地先			新舞子地先		
		気温	水温	比重	気温	水温	比重	気温	水温	比重
38年	上	22.1	22.4	19.1	20.2	20.5	23.5	20.1	20.5	23.6
	中	20.5	20.7	20.2	19.8	19.4	23.0	19.9	19.8	22.4
	下	19.0	18.8	20.2	17.5	17.8	23.0	17.8	18.9	22.1
11	上	17.3	17.6	20.7	15.9	16.7	23.4	17.2	17.2	22.9
	中	14.9	14.8	21.1	14.0	14.4	23.0	15.7	16.2	22.9
	下	13.5	13.6	20.6	13.2	13.6	22.4	13.8	13.9	23.0
12	上	10.8	11.0	22.6	10.6	11.1	22.4	12.8	13.5	22.9
	中	9.2	9.3	22.2	9.0	10.1	23.2	12.0	12.8	23.3
	下	8.5	8.4	22.2	8.5	8.4	22.6	11.4	11.6	23.9
39年	上	6.3	7.5	22.2	6.5	7.6	23.0	11.0	9.6	23.7
	中	6.7	6.5	22.8	8.8	7.6	23.3	9.5	9.3	22.9
	下	5.4	5.8	22.7	7.1	6.2	23.5	9.2	8.0	24.0
2	上	6.2	5.7	22.9	5.3	5.5	22.9	8.9	7.5	23.9
	中	6.4	6.2	22.7	4.8	5.1	22.8	7.1	7.5	22.7
	下	8.0	7.0	22.8	5.3	5.4	23.5	11.3	8.5	23.7
3	上	8.8	7.9	22.7	8.6	6.9	22.7	10.0	9.2	23.8
	中	10.1	8.9	22.4	9.1	7.4	22.9	11.9	11.0	24.1
	下	11.4	10.5	22.0	8.0	8.0	22.7	11.7	10.0	23.4

7, 漁村青壮年実践活動促進事業

1, 事業の目的

本県の水産関係研究グループは約65あり、各グループはそれぞれ自主的な目的をもつて活動しているが、これ等の活動を一層助長促進し、沿岸漁業構造改善事業のにないてとなるグループ員を育成することを目標に次の各事業を行なった。

2, 事業の内容

(1) 漁村青壮年国体研究協議会開催事業

開催地	期日及び期間	参加人員	対象グループ名	主要課題	助言者
名古屋市	38年9月16日1日間	38名	全県グループ	本年度各グループ研究計画立案	東京大学, 県
蒲郡市	38年9月26日1日間	115名	三河湾関係グループ	〃	〃 〃
名古屋市	38年2月15日1日間	42名	全県グループ	のり張込み予報について	〃 〃
名古屋市	39年3月2日1日間	35名	全県グループ	研究成果報告会技術交流報告会	〃 〃
計	4日間	230名			

本事業はこのほか、各地区ブロックにおいて30数回、各グループは月1回集会を開いている。

(2) 水産技術交流事業

視察地名 項目	宮城県石巻市	兵庫県香住町	岩手県大船渡市
導入技術の概要	底刺網	いわし浮敷網漁業	のり引き流しわかめ
視察団の人員 構成	指導職員 1名 グループ員 3名	指導職員 1名 グループ員 4名	指導職員 1名 グループ員 4名
実施期日 日程	4日間 昭和38年8月8日~11日	4日間 昭和38年10月21日~24日	5日間 昭和38年12月8日~12日間
実施方法の概要	現地見学及び グループ員との座談会	左に同じ	左に同じ
実施後の普及 方法概要	報告書, 集会にて発表	左に同じ	左に同じ
視察地名 項目	岡山県香川県丸亀市	熊本県三角町	香川県高松市引田町
導入技術の概要	のり人工採苗経営	のり人工採苗, 施肥	魚類養殖
視察団の人員 構成	指導職員 1名 グループ員 4名	指導職員 2名 グループ員 5名	指導職員 1名 グループ員 4名
実施期日 日程	5日間 昭和39年1月20~24日	7日間 昭和39年2月2日~8日	4日間 昭和38年8月1,3日~16日
実施方法の概要	左に同じ	左に同じ	現地集団視察
実施後の普及 方法概要	左に同じ	左に同じ	左に同じ

項目	視察地名	石 川 県
導入技術の概要		婦 人 部 活 動
視察団の人員構成		指 導 職 員 1 名 グ ル ー プ 員 3 名
実施期日 日程		4 日 間 昭 和 3 8 年 1 0 月 8 日 ~ 1 1 日
実施方法の概略		現 地 見 学 及 び グ ル ー プ 員 と の 座 談 会
実施後の普及方法概略		報 告 書 , 集 会 に て 発 表

本事業はこれに相呼応して各グループが全国各地において実施しており、報告会も各研究発表会等で行なった。

(3) 技術修練会開催事業

区分	開催地	期日及び期間	参加人員	修練会の種類(内容)	講師依頼先又は講師名
漁業技術修練会	浦 郡 市	38年8月28日~31日 4 日 間	125名	栽培育種について のり漁場の海洋学について のりの種類について のりの生理と栄養 のり人工種付について のり施肥について わかめ養殖について	名古屋大学 志村 喬 東京水産大学 新野 弘 三浦 昭雄 東京大学 斉藤 雄之助 東海日本研究所 須藤 俊造 愛知水試 倉掛 武雄 東京大学 斉藤 雄之助
	幡豆郡幡豆町	38年12月3日~4日 2 日 間	35名	水産物の流通について 養殖場の環境と飼料について 海産養魚の現況とたこの養殖	名古屋市場 富田 民蔵 東京大学 平野 礼次郎 東海区水産研究所 田中 二良
	半 田 市	38年12月5日~6日 2 日 間	32名	うなぎの養殖技術 どじょうの養殖について にじます養殖について	天竜漁連 野口 博 幡豆中学校 鈴木 亮 県内水面増殖指導所
	知多郡南知多町	39年3月2日~5日 4 日 間	115名	底曳漁具の改良 漁業機械の省力化	東海区水研 宮崎 千博 豊浜無線局 石黒 正一 紀陽鉄工 KK 吉田 健二
	計		12日間	223名	

漁船運航技術修練会	幡豆郡一色町	38年7月25日～31日	7日間	51名	航海修練会(a)	名古屋船舶職員養成協会
	〃 吉良町	39年1月15日～21日	7日間	54名	〃 (〃)	〃
	〃 一色町	39年2月1日～21日	21日間	45名	機関修練会(b)	〃
	知多郡南知多町	38年12月21日～27日	7日間	73名	通信修練会(a)	名古屋工業大学
	渥美郡渥美町	39年1月27日～2月2日	7日間	71名	〃 (〃)	豊浜漁業無線局
	蒲都市形原町	39年3月23日～29日	7日間	86名	〃 (〃)	〃
	計		56日間	380名		
合	計		68日間	603名		

(4) 研究発表大会の開催

本年から漁村青壮年婦人グループ活動実績発表大会と愛知のり研究発表大会を統合して愛知の水産研究発表大会と改称し4月下旬に行なった。(後記)

(5) 研究グループの活動状況

ア、研究グループの現状

種別	数	員数	平均年齢	年間平均活動資金	顕微鏡	その他
漁協	65	9,500				
青壮年集団	51	800	34	10万円, 最高100万円	110台	200
婦人集団	14	4,000	37	8万円, 最高20万円		
連合体	10	4,635				

その他の器材は水温計, 照度計, 採水器等

イ、研究発表大会

(ア) 第8回東三のり研究発表大会

a, とき 昭和39年4月10日

b, ところ 豊橋市公民館

c, 参集者 約200名

d, 発表件数 18件

e, 入賞者 (県大会出場)

のりの低温保存

下佐協のり研究会

宇井一生

わか漁協とわら簀の利用

杉山のり研究会

花井志一

ソメワケアマノリの考案

前芝のり研究会

前田一志

沖における網維持の工夫

牟呂のり研究会

小林智

愛されるのり養殖を目指して

大崎のり研究会

河合清

のり抄機と共同作業

渡津のり研究会

近田信夫

防波柵漁場におけるわかめの養殖

中山のり研究会

荒木初二

(イ) 第4回知多水産研究発表大会

a, と き 昭和39年4月18日

b, ところ 半田のり共販所

c, 参集者 約150名

d, 発表件数 6件

e, 入賞者 (県大会出場)

船体改造に伴う経済効果

豊浜漁業研究会

石黒政好

グループ活動によるたこ蓄養試験

師崎漁業研究会

山田武夫

かれいの蓄養

豊浜漁業研究会

大岩昭一

のり養殖業経営の一考察

小鈴谷のり研究会

竹内可一

(ウ) 第7回西三のり研究発表大会

a, と き 昭和39年4月20日

b, ところ 幡豆郡一色町中部公会堂

c, 参集者 約200名

d, 発表件数 9件

e, 入賞者 (県大会出場)

のり浮流し養殖における適正品種の撰定

寺津平坂のり研究会

柴田昌彦

環境とのり養殖

味沢のり研究会

鈴木稀吉

今年度のり養殖の概要と反省

吉田のり研究会

牧辰夫

簡易のり抄機による省力化

吉田のり研究会

牧 巖

施肥による経済効果

東幡豆のり研究会

鈴木 巖

(エ) 昭和38年度愛知の水産研究発表大会

a, と き 昭和39年4月23日

b, と ころ 豊橋市公会堂

c, 参集者 約800名

d, 発表件数 16件

e, 入賞者

最優秀賞(愛知県知事)

寺津平坂のり研究会

柴田昌康

優秀賞(豊橋市長)

下佐協のり研究会

宇井一生

優秀賞(愛知県漁業協同組合連合会長)

吉田のり研究会

牧辰夫

優秀賞(愛知のり協議会長)

豊浜漁業研究会

石黒政好

このうち1, 2位は5月14日全国大会において発表した。